

13. 精神薄弱成人の歯周疾患とその対策

— 3年間のブラッシング指導とスケーリングによる臨床的变化について—

佐藤浩幸, 野村昌人, 綱川健一,
西尾信之, 水本修一, 飯野守康,
坂東篤光, 柳瀬直樹, 水上裕太郎,
松原重俊, 坂東省一, 松ヶ崎真秀,
高松隆常, 加藤 熙 (保存・I)

我国には、多くの精神薄弱成人が存在し、その歯科治療の要求が高いにもかかわらず容易に歯科医療を受けられず、とくに歯周疾患は放置されているのが現状である。そこで我々は3年前から、精薄成人に対して歯周疾患を中心とした歯科疾患を管理予防する合理的な方法を確立する目的で研究を行ってきた。

診査対象は、精薄成人施設に入園している45名、年齢は17～52歳、IQは14～72で、口腔内診査（口腔内写真撮影後）、歯垢付着率Pl.R、歯肉炎指数GI、病的ポケット歯率Po.Rを求めた。理解力の低い精薄成人の口腔清掃指導には本人に対して直接指導するだけでは効果がないので、日常生活指導をしている施設の指導員にブラッシングの重要性を認識させ、その協力のもと精薄者に毎日の作業訓練の1つとしてブラッシングを行わせた。次の2年間は一般社会への復帰を考え作業訓練ではなく、指導員の指導のもと食後に行わせた。

この間、指導員と精薄者に対し3～6ヶ月毎の再指導と再診査を行った。スケーリングは指導後6～12ヶ月にPl.R 25%以下の者に行い、さらに2年6ヶ月後に全員に行った。

その結果はPl.Rは初診時51.9%から3年後には23.4%、GIは1.37から0.47、Po.Rは32.1%から20.8%と改善された。さらに1年間の作業訓練により、自分自身でブラッシングできるものは初診時の2倍に増加し、逆に介助を必要とするものは、半数に減少した。

以上の結果、理解力の低い精薄成人への口腔清掃指導は、本人に対して直接指導を行うだけでは十分でなく、日常生活を共にしている者にブラッシングの重要性を

認識させ、訓練の1つとして指導することが、最も効果的であり、さらに日常の徹底した指導によりかなりの者が、ブラッシングが上達し、習慣化することが明らかとなった。

質 問 渡部 茂(小児歯科)

非常にいい成績をあげているが、指導員への指導はどのように行っているのか。

回 答 佐藤浩幸(保存・I)

指導員に対しては、最初にモチベーションに重点をおいた口腔清掃指導を行い、さらに精薄者に適したブラッシングのテクニック、綿棒を用いたプラークの染め出し法、プラークの記入法を指導しました。

第1回目の口腔内診査後、指導員に上記のことを指導し、毎日の作業訓練時にブラッシングの指導を園生に行ってもらった。そして我々は1ヶ月後に、指導員が指導しているところを観察し、精薄者各個人に適した磨き方を指導員にアドバイスしました。

その後、2, 4, 6, 12ヶ月に指導員と園生を当科へ呼びだし、診査と指導を行いました。1年以後は6ヶ月毎に診査と指導を行っています。

質 問 猪股孝四郎(口腔生理)

IQとブラッシングの関係はありますか。

回 答 加藤 熙(保存・I)

IQとブラッシングの能力は、かならずしもパラレルではない。年齢の低い時から母親の教育を受けている者は、IQが低くてもブラッシング能力は高く、歯肉も良好な状態であった。しかし、平均すれば、IQが高い方が能力は高いようである。